

Rainbow for Japan Kids で大活躍！

先週、8月2日に行われましたRainbow for Japan Kidsで本校の3年生の4名（上田啓人さん、ホール スポッシュ 健太朗さん、山本侃司さん、デモス 綺菜さん）が立派な発表を行ってくれました。

当日は、副校長の津田さんと図書司書の後藤さんが日本から来た16名の子どもたちと本校の4名の生徒のためにレイを作ってくださいました。本校の4名の生徒はもちろん、日本から来た子どもたちも全員、このレイをかけて発表してくれました。日本の子どもたちから、「大変ありがたく、良いお土産になりました。」という言葉聞いて嬉しくなりました。これからも、このオハナの精神を大切にしたいものです。

生徒たちは、ハワイと日本との関係性も含め、今後のハワイの在り方について日本語と英語で提案してくれました手前味噌ながら、本校の生徒の発表が最も素晴らしかったと思います。発表後、隣に座られていた来賓の方に、「先生もほっとされましたね。」と言われ、自分も緊張していたんだと改めて感じました。保護者の方々と挨拶をして、初めて安心した気持ちになりました。

翌日も生徒たちとラジオ番組に出演させてもらいました。聞かれた方もいらっしやるのではないのでしょうか？生徒たちの堂々とした対応を見て、大変頼もしく感じました。

今回の発表をとおして感じたことは、生徒たちが、本校の目指すものを具現化してくれたと言うことです。ここに到るまで、支えていただいた関係者の皆様や保護者や担任の先生方に感謝したいと思います。併せて今後もこのような活動が新しい本校の伝統になることを祈念いたします。

なお、当日の生徒たちの発表の様子が <http://youtu.be/R27rxhgA0Vw> で見られます。ぜひ御覧ください。

8月9日に思うこと

毎年、私の出身県である長崎では、8月9日にすべての学校で平和集会が行われます。その日が休みの日であっても必ず実施されます。「二度と悲惨な戦争を起こしてはならない。」という強い意志を確認するためです。平和について、8月6日(広島 原爆投下)、8月9日(長崎 原爆投下)、8月15日(終戦記念日)、12月8日(真珠湾攻撃)には、思いをはせたいと思います。

鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和記念館には、当時、特攻で亡くなった若者たちの遺書が数多く残されています。その一部をご紹介します。

母上様御元氣ですか
永い間本当に有難うございました
我六歳の時より育て下されし母
継母とは言え世の此の種の母にある如き
不祥事は一度たりとてなく
慈しみ育て下されし母
有難い母 尊い母
俺は幸福であった
ついに最後迄「お母さん」と呼ばざりし俺
幾度か思い切つて呼ばんとしたが
何と意志薄弱な俺だったろう
母上お許し下さい
さぞ淋しかったでしょう
今こそ大声で呼ばして頂きます
お母さん お母さん お母さんと

母を慕いて

相花信夫さん(享年18才)の遺書です

信夫さんがまだ6歳のときのことで

父は、後妻をむかえました。後妻は、二人の兄弟の継母となっただけけれど、生母が恋しい二人は、なかなか継母になつかなかつた。さからいもした。「おかあさん」となんて、一度も呼んだことなどなかった。けれど継母は、二人の兄弟を実の子以上に可愛がり、献身的に愛情を注いで育ててくれた。おそらく、なかなかついてくれない兄弟に、人知れず涙を流す日もあったことでしょう。けれど継母は、世間で言うような、継母による先妻の子イジメのようなことは一度もしなかつたし、それ以上に兄弟二人に、ひたすら愛情を注いでくれた。

けれど、そんなやさしい継母に対し、兄も、弟の信夫さんも、なんだか照れくさくて、面と向かって「お母さん」とは一度も呼ぶことができなかった。表面上は、逆らってばかりいた。

いよいよ飛び立つことになったある日、相花信夫さんは、そんな継母に対して手紙を書きました

た。一文字も崩さず、楷書で、丁寧に、ひともじひともじに、心を込めて、手紙を書いた。

その手紙が、自分の遺書になることを知って、涙をこらえながら、最後の言葉を書きとめます。

藤井一少佐(享年 29 才)の絶筆

特攻隊の教官だった藤井一少佐は、教え子が続々と出撃していく中で「必ずオレも後に続く！」と約束を繰り返していました。

しかし、重要な職務を持ち、妻と子二人の家族を持つ隊長には出撃命令は出されませんでした。何度嘆願書を出してもだめです。逆に妻は夫に死なないで欲しいと何度も説得を繰り返しました。しかし、夫の決意があまりにも固いことを悟った妻は、「私たちがいたのでは後顧の憂いになり、思う存分の活躍ができないでしょうから、一足お先に逝って待っています」と遺書を残し、3才と1才の女の子を連れて入水自殺してしまいました。

引き上げられた妻子の遺体のそばで号泣した教官は再度血書嘆願を出し、やっと出撃を認められたのです。

母とともに消え去った
幼い命がいとおいしい
まもなく会いに行くか
らね
お父さんの膝でだっこ
して寝んねしようね
それまで泣かずにまっ
歩いてください

最後は、大石清伍長のたった一人残される妹に宛てた遺書です。

なつかしい静(しい)ちゃん
お別れの時が来ました。
兄ちゃんはいよいよ出撃
をします。
この手紙が届くころには、沖
縄の海に散っています。
思いがけない父・母の死で、
幼い静ちゃんを一人のこし
ていくのは、とても悲しいで
すが許して下さい。
兄ちゃんの名で預けてある郵便
通帳とハンコ、これは静ちゃ
んが女学校に上がる時に使
って下さい。
時計と軍刀も送ります。
これも木下のおじさんに頼
んで、売ってお金に換えな
さい。
兄ちゃんの形見などより、こ
れからの静ちゃんの人生の
方が大事なのです。
もうプロペラが回っています。
さあ、出撃です。
では兄ちゃんは征きます。
泣くなよ静ちゃん。
がんばれ！

大石清伍長の遺書を託された兵からの手紙

大石静恵らやん、突然、見知らぬ者からの手紙でおどろかされたことと思ひます。わたしは大石伍長どのの飛行機がかりの兵隊です。伍長どのの今日、みごとに出げき(撃)されました。そのとき、このお手紙をわたしにあづけて行かれました。おとどけいたします。

伍長どのの、静恵らやんのつくつたにんぎやう(特攻人形)を大へん だいじにしてとられました。いつも、その小さなにんぎやうを飛行服の背中につつてとられました。ほかの飛行兵の人は、みんなこし(腰)や 落下さん(傘)のバクタイ(縛帯)の胸にぶらさげてみるのですが、伍長どのの、突入する時にんぎやうが怖がると可哀さうと言つておんぶでもするやうに背中につつてとられました。飛行機にのるため走つて行かれる時など、そのにんぎやうがゆらゆらとすがりつくやうにゆれて、うしろからでも一目で、あれが伍長どののとすぐにわかりました。伍長どのの、いつも静恵らやんといつしよに居るつもりだつたのでせう。同行二人・・・仏さまのことばで、さう言ひます。苦しいときも、さびしいときも、ひとりぼつらではない。いつも仏さまがそばにゐてはげましてくださる。伍長どのの仏さまは、きつと静恵らやんだつたのでせう。

けれど、今日からは伍長どのの静恵らやんの”仏さま”になつて、いつも見てゐてくださること、思ひます。伍長どのの勇かんに敵の空母に体当たりされました。静恵らやんも、りつばな兄さんに負けないやう、元氣を出してべんきやうして下さいます。さやうなら

これらの遺書を読んでいると、死に向かう極限の状態の中で、家族に対する深い愛情を感じ取ることが出来ます。改めて、ご冥福をお祈りします。

残された我々は、未来ある子どもたちに、二度とこのような悲惨で悲しい思いをさせないように、「平和」を希求していきたいと思ひます。